

Aug. 2015

# ZENBI

全国美術館会議機関誌

---

August 2015 [Vol.8]

# デジタル高精細撮影への転換 4"×5"から無限大へ。

NISSHA はデジタル高精細撮影の無限の可能性を追及しています

従来の「4×5」ポジフィルムよりも高解像度なのにリーズナブル。  
印刷用に画像分解する必要もなく、また色褪せることもありません。



最大 28 億画素まで。データ活用にあった仕様で撮影  
赤外線高精細デジタル撮影が可能  
豊富な国宝・重要文化財のデジタルアーカイブ実績  
文化財、美術品のあるところ、どこでも出張撮影

## NISSHA

日本写真印刷株式会社／日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

東京都港区大崎 2-11-1 大崎ウィズタワー TEL : 03-6414-7300 担当：梅澤  
京都市中京区壬生花井町 3 TEL : 075-823-5152 担当：中上

## CONTENTS

### ブロック報告

|    |                                          |
|----|------------------------------------------|
| 2  | 〔北海道〕 子どもをめぐる展覧会の試み 星田七重                 |
| 4  | 〔東北〕 新規加盟館のコレクション展から、全国美術館会議への期待を読む 伊藤 匡 |
| 6  | 〔関東〕 美術館の来し方行く末 浅井俊裕                     |
| 8  | 〔東京〕 やっぱり見て飽きない作品が重要だ！ 山村仁志              |
| 10 | 〔北信越〕 北陸新幹線開業元年、にぎわいと活気のなかで 浅地 豊         |
| 12 | 〔東海〕 少女は強くなったか？ 以倉 新                     |
| 14 | 〔近畿〕 「展示の環境」と「解説パネル」について 南城 守            |
| 16 | 〔中国〕 巡回展は中国地方を駆けめぐる 高嶋雄一郎                |
| 18 | 〔四国〕 だれのための美術館なのかー美術でつながる地域社会ー 東浦博史      |
| 20 | 〔九州〕 地方でアートに向かって 植松 篤                    |

### 新規会員館紹介

|    |                      |
|----|----------------------|
| 22 | —— (一財) 藤城清治美術館 那須高原 |
| 23 | —— 富山市ガラス美術館         |
| 24 | —— 古田織部美術館           |
| 25 | —— (公財) 泉美術館         |
| 26 | —— 今井美術館             |
| 27 | —— 安来市加納美術館          |
| 28 | —— 大分県立美術館           |
| 29 | —— (公財) 二階堂美術館       |

賛助会員各社 30

事務局から 31

編集後記 33

投稿要領 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 35

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.8 2015年8月1日発行 ©全国美術館会議

〔編集〕 全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎 青山杏子

〔発行者〕 全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

〔デザイン〕 宮谷一孝 (日本写真印刷コミュニケーションズ) 〔印刷〕 日本写真印刷株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

## 子どもをめぐる展覧会の試み

星田七重 (ほしだ ななえ・市立小樽美術館)



北海道の各美術館では、冬休みの時期に子どもを中心として幅広い世代に美術の楽しみを発見してもらおうと、多彩な体験型プログラムを導入し趣向を凝らした企画展が開催された。子どもと親が一緒に楽しみながら美術に触れる展覧会は、北海道立近代美術館が先駆的な企画として1978年に「子どもと親の美術館」を始め、「アミューズランド」を経て、現在の「冬のワンダー☆ミュージアム」と変遷しながら、冬恒例の展覧会として定着している。

冬のワンダー☆ミュージアム「どうぶつたち、大集合!」(2014年12月20日～2015年1月18日)は、動物を通じて美術の魅力を発見してもらおうというコンセプトで、人々の生活の傍らにいる小動物から、猛獣、空想上の動物まで、絵画や立体に表現された動物を展覧した。展覧会のクマのキャラクターが、印刷物や会場の案内表示に生かされていた。無料配布の「クイズ&セルフガイド」は、切り取るとポストカードになる仕掛けや、会場内の7つのクイズに答えるたびに、巻末にスタンプが押せるようになっており、集めたスタンプが最後に自分だけの作品になるよう工夫されていた。

注目は、普及活動に子どもの成長と切り離せない「絵本」の読み聞かせを導入したことである。会期中、展示室内で高校生のボランティアが、絵本の読み聞かせを行っている。絵本は読む人と聞く人が物語を一緒に味わい豊かな時間を過ごす。言葉と絵で子どもの想像力を刺激するだけでなく、大人には癒し効果があり、この展覧会に相応しい活動だと感じた。

ピアノ演奏と絵本の読み聞かせのジョイント企画「ピアノと絵本の音楽会」では、通常のミュージアムコンサートとは異なり、子ども向けのトークを交え、ピアノに合わせて展覧会担当学芸員が絵本の読み聞かせを行うというユニークなものだった。演奏曲「こいぬのワルツ」「動物の謝肉祭」と同タイトルの展示作品があり、コンサート前後で、作品を観賞する親子が多く見られたという。

昨年度、札幌芸術の森美術館は、就学前の子どもとその保護者に対象を絞った「0歳からのげいじゅつのもり」(2014年2月22日～4月13日)を開催している。解説パネルは保護者向けと子ども向けに分けて掲示され、ユニークな豆本を模したガイドブックも制作された。展示室は、「触れて良い・悪い」「撮影可・不可」に分かれて構成。招待された現代美術家による作品は写真撮影を許可したことで、子どもが作品と触れ合う場を家族が写真に収めることができた。展示室の終わりには「へんしんかぶる系オバケ」と題したワークショップがあり、茶色の紙袋を主材に小分けした布や毛糸を糊で貼り付け、クレパスで着色してマスクを制作する。作品はその場で持ち帰ることができ人気であった。

その継続事業として同工芸館では、「0さいからのげいじゅつのもり あそびのクラフト編」(2015年1月17日～4月19日)と題し、全作品触れて遊ぶことのできる展覧会を実施した。すべてカーペット敷きの展示室に、道内の各工房、北海道森林組合連合会、音威子府高校などからの出品作品と工芸館

が所蔵する世界のあそべるクラフトを集め、さらに集客を伸ばした。

市立小樽美術館は「伊藤英二 木のおもちゃ展」(2014年10月18日～12月28日)を開催し、観覧者が当初の予想を大きく上回った。障がい児教育に携わりながら木のおもちゃに着目し、その後木工作家となった伊藤英二(1932-2012)の、シンプル、丈夫、安全の理念のもとに制作された木工作品を一堂に紹介。木の砂場や滑り台といった大型遊具、木馬、乗り物の小型おもちゃなどを展示し、体験ゾーンは全面カーペット敷きで靴を脱いで入場し、直接手で触っても良いように対応した。対象は小学生を想定していたが、蓋をあけてみると未就学児で賑わった。秋冬の北海道は公園の遊具が撤去され、安全に遊べる場所が不足したためでもある。

上記の展覧会は、これまであまり来館されなかった乳幼児を含む未就学児とその保護者を新たな対象とし観覧者数を伸ばした。子ども向けのキャラク

ターを用いたわかりやすい解説やワークシート、部分的に写真撮影を許可して鑑賞の場の垣根を低くし、作品と身近に接してもらうための工夫が随所に汲み取れた。子どもが自由に創作できるコーナーが設けられ、作品に触れたり動かしたりできる体験型プログラムの空間が用意されていた。触る、作るというコーナーは子どもに人気があり、そうした場所が多いほど来館者には好評となる。来館者アンケートでは子どもと大人が一緒に楽しみ、美術館の敷居が低くなったという好意的な意見が寄せられ、今後の継続を望む声も多かった。

その反面、工夫を凝らして展示のなかに構成した収蔵作品や、併設する常設展はほとんど素通りされてしまう。ワークショップは賑わうが、収蔵作品はなかなか見てもえなという苦しさがある。それまで来館が難しかった子育て世代にもっと美術館を利用してもらいたいけれども、収蔵作品や館の性格とより深い結びつきを次の課題として考えさせられた。



「0さいからのげいじゅつのもり あそびのクラフト編」会場風景

## 新規加盟館のコレクション展から、 全国美術館会議への期待を読む

伊藤 匡 (いとう きょう・福島県立美術館)



東日本大震災の被害が大きかった岩手、宮城、福島の各県では、被災で活動停止状態が続く館がある一方で、震災後新たに全国美術館会議(全美)に加盟した館もある。今回の東北ブロック報告では、新たに加盟した館の活動状況を中心にレポートする。

岩手県の一関市博物館は、震災の翌年 2012 年に加盟した。一関市は、奥州藤原氏の本拠平泉の中心都市であり、また江戸から明治時代にかけて蘭学者や国語学者を多く輩出したことなどから、同館は歴史分野の比重が高いが、地域に関わる美術を調査し展示する活動も、年に一回のペースで続けている。今年は「福井良之助孔版画展」(2015 年 1 月 24 日～3 月 29 日)が開催された。洋画家福井良之助は、母方の実家があった一関で 20 代を過ごし、一関中学の図画教師としても勤務した。同僚から謄写版印刷、いわゆるガリ版刷りの手ほどきを受け、独自の研究を重ねて独特の雰囲気を持った孔版画の表現を創作した。同展は個人コレクターから寄贈された 67 点を展示するもので、同館としても福井作品の収蔵は初めてである。

同館の全美加盟には、美術館関係の情報不足の解消と、博物館的なイメージが強い同館の美術部門のアピールというねらいがあるようだ。要求してもつかなかった全美会費の予算が、震災後によりやく認められたという。震災直後の孤立感は規模が小さい館ほど強く、近隣地域のネットワークに加えて、全国的な組織につながることの重要性を、

館だけではなく行政の担当者も感じていたのだろう。

宮城県仙台市にある福島美術館は、「街のちいさな美術館」を自称する社会福祉法人が運営母体の美術館である。そのコレクションは、仙台藩伊達家ゆかりの品々や仙台地域的美術が中心となっている。同館は震災で非常な苦労を強いられた。築 40 年以上のビルの一角を使用していたが、地震の揺れで壁のあちこちに亀裂ができ、やがて雨水が浸透するようになった。外部との連絡が不通となり、県や博物館協会等からの被害確認の連絡も届かなかった。既存のネットワークが機能しなかったのである。わずかに学芸員の個人的なつながりでコレクションを市内の大学に一時避難させるなどの対処をしたが、同館を運営する福祉法人は所有する他施設の被害も大きいため美術館に手が回らない状態で、館再開の目処も立たなかった。そこで同館は HP などで全国に向けて支援のお願いを発信し、また窮状を知った全美も寄付の呼びかけ等などを行った。その結果修繕費の目途が立ち、運営する社会福祉法人も美術館の存続を決定し、震災から 1 年 9 ヶ月後に再開を果たしたのである。このような経験から、同館は全国的なネットワークへの参加の必要性を痛感し、2014 年に全美に加盟した。

この冬から春にかけて同館では「みやぎのタイムカプセル vol.1 熊耳耕年(くまがみ・こうねん)とその時代」展(2014 年 10 月 1 日～11 月 24 日)、「鳥

づくしからたどる絵画の見方」展(2015 年 4 月 8 日～5 月 31 日)などの企画展を開催している。展示作品数は少ないが、1 点 1 点に画題にまつわる物語や描かれている事物の意味などの解説が施され、ていねいな展示という印象を受ける。ほとんどは館藏品だが、関東大震災時の様子を描いた熊耳耕年の作品など貴重な発見もある。震災後の活動を通して同館は、埋もれている作品、忘れられた作家に光をあてたいと意識しているという。その理由は、東日本大震災で家や蔵が破損し、代々受け継がれてきた書画骨董類が中身を確かめられることもなく、ゴミとして廃棄されたり、業者に引き渡されている現実に対して、「お宝かもしれないから捨てないで」というメッセージなのだ。

福島県須賀川市にある CCGA 現代グラフィックアートセンターは、運営母体が公益財団法人へ移行するにあたり全美加盟を申請し、2014 年に加盟した。全美の加盟が震災と直接関係があったわけではないが、市内の小中学生版画コンクール会場が震災で壊れて使えなくなったために会場を引き受けたり、版画工房を新設して小中学校の教員向

けに版画実技講習を行うなど、公益財団化を契機として地域との連携強化を指向している。

同館では開館 20 周年を記念して「21 世紀のグラフィック・ビジョン」展を開催している(2015 年 3 月 1 日～6 月 7 日)。同館コレクションの 2 本の柱となっているアメリカの版画工房〈タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション〉と大日本印刷の〈DNP グラフィックデザイン・アーカイブ〉の中から、版画作品とポスター等のグラフィック作品の代表的な作品 90 点を展示している。戦後日本のグラフィックデザインを牽引してきたデザイナーたちが第一線を退きつつある現在、各デザイナーの関連資料を保存・整理することが喫緊の課題になっている。同館が全美加盟によって期待することもその点で、全美のネットワークを通じてアーカイブ化の課題などについて情報交換、共同研究を行いたい意向である。

コレクションの散逸を防ぐこと、アーカイブ化を進めること、新たな視点で見つめて活用すること。美術館の原点ともいえるコレクションについて、各館各様のアプローチを感じることができた。



一関市博物館



「鳥づくしからたどる絵画の見方」展会場風景 福島美術館

## 美術館の来し方行く末

浅井俊裕 (あさい としひろ・水戸芸術館現代美術センター)



「恋人の聖地」に認定されているという横須賀美術館であるが、開館以来7年以上も行ったことがなかった。月日のたつのは早いものである。それにもかかわらず今回なぜ水戸から東京まで出て私鉄に乗り換え、さらに駅からバスで20分、全行程で3時間以上もかけて出かけたかという、小林孝亘という作家にそれだけの魅力があったからだ。けっして以前自分の展覧会に出品してもらった義理とかではない。今さら言うまでもなく、小林は潜水艦に自分をなぞらえた初期作品、バンコクでの夜景や仏画のような落ち着いたポートレート、こもればがさこむ森の絵など、異次元の気配を感じさせる作品を描き、具象絵画の可能性を広げた新しい世代の作家である。もっとも、若手作家と言われた彼も既に50歳を超え、より円熟味を増している。思えば月日のたつのは早いものである。

今回の久々の大規模個展「小林孝亘展 ― 私たちを夢見る夢」(2014年11月15日～12月23日)では、彼の代表作に加えて、いつもの淡い光に代わって人魂を描いた《Corpse Candle》、鳥に連れ去られようとする人《Flying》、積み木を交通標識のように意味ありげに森の中に積み上げた《Block》、など5点の新作が展示されていた。まさに「意味」が前面に出ようになっているのだ。彼は、自己を投影した潜水艦はもとより、犬の顔をアップで描いた《House Dog》にしろ、白い枕を描いた《Pillows》にしろ、日常のなかのありふれた光景を深く洞察し、たとえ人物は描かれていなくても

人の気配を感じさせるような、あるいは日常とは別の世界に誘うようなファンタジックな雰囲気をもった絵を描いてきた。意味深長でありながら物語の明確な解釈は見る者の想像力に任されていたが、今回は絵画に託された物語の読みとりにある一定の方向性をもたせている。この微妙だが大きな変化は、彼のさらなる進化へのサインであるような気がする。

こうした良い作品、しかも大作をゆったり、じっくり見せるのが美術館の使命ではないだろうか。今どきの現代美術では、「コンセプト」や「コミュニケーション」という観念に引きずられて、物としての作品を作らず各種の「プロジェクト」なるものを行う作家も増えている。そうした活動をすべて否定するわけではないが、少なくとも美術館本来の仕事とは違うのではないか。やはり美術館は後世に残すべき作品を収集、保管、研究、展示するのが本分だと思う。

そんな思いを込めて、以前拙著のあとがきに次のように書いた。「美術館というシステムにこだわらず活動の場を広げただけに見える現代美術ですが、その結果『中心の喪失』どころではなく雲散霧消してもはや美術ではなくなってしまったのではないか、『開かれた』と言えど耳触りが良いですが要するにプロに対する畏敬の念が(美術に限らずあらゆる分野で)無くなってしまったのではないか」(『拡散する美術』求龍堂)。

作品を作らない作家と同じように、建物を建て

ずにプロジェクトやプロデュースを行うだけの建築家も多くなってきたが、磯崎新は「その時点の状況にインパクトを与えただけでなく、新しい流れをうみだすきっかけ」になるような建築作品が約20年ごとに縦起的に出現した、と述べ、1935年の堀口捨己「岡田邸」、55年の丹下健三「広島平和記念館本館」、75年の磯崎新「群馬県立近代美術館」、95年の妹島和世「岐阜県営住宅ハイタウン北方・妹島棟」をあげている(『日本建築思想史』太田出版)。群馬県立近代美術館が開館したのは74年だが10月であったので議論を簡素化するために75年としているのだろうが、開館40年を契機に74年という年をテーマにした2部構成の展覧会が同館で開催された。第1部「1974年ニ生マレテ」(2014年6月28日～8月24日)では74年生まれ作家の作品を展示し、第2部「1974年―戦後日本美術の転換点」(2014年9月13日～11月3日)

では当時の作品や磯崎のドローイングやデッサン、建設前の「群馬の森」の姿や竣工直後の館の写真等を見ることができて興味深かった。この館ができた70年代、映像や写真を意識した作品や野外彫刻展の開催など、美術はその表現の形態や発表の場所を大きく広げ、「観客と作品のインタラクティビティの成立するインスタレーション・ワークに向かいつつ」(『日本建築思想史』)あったが、それでも作家は物としての作品を作り、美術館という場所は、良くも悪くも確固として存在していたことがわかる。

今年は「妹島棟」から20年になる。やはり月日のたつのは早いものだ。今年生まれる建築作品は今の建築状況にどんなインパクトを与えるのだろうか。それともう建築作品も美術作品も物としては存在しなくなるのだろうか。



「小林孝亘展 ― 私たちを夢見る夢」展会場風景 横須賀美術館



「1974年―戦後日本美術の転換点」展会場風景 群馬県立近代美術館

## やっぱり見て飽きない作品が重要だ！

山村仁志(やまむらひとし・府中市美術館)



2014年後半の東京ブロックでは、相変わらず多くの展覧会が開催され、数々の名作を味わうことができた。私が見に行った大型展だけでも、「オルセー美術館展」(国立新美術館、2014年7月9日～10月20日)、「生誕200年ミレー展」(府中市美術館、2014年9月10日～10月23日)、「菱田春草展」(東京国立近代美術館、2014年9月23日～11月3日)、「東山御物の美—足利将軍家の至宝展」(三井記念美術館、2014年10月4日～11月24日)、「フェルディナント・ホドラー展」(国立西洋美術館、2014年10月7日～2015年1月12日)、「高野山の名宝展」(サントリー美術館、2014年10月11日～12月7日)、「ウフィツィ美術館展」(東京都美術館、2014年10月11日～12月24日)、「日本国宝展」(東京国立博物館、2014年10月15日～12月7日)、「ボストン美術館ミレー展」(三菱一号館美術館、2014年10月17日～2015年1月12日)、「新印象派展」(東京都美術館、1月24日～3月29日)、「ボッティチェリとルネサンス—フィレンツェの富と美」(Bunkamura ザ・ミュージアム、3月21日～5月10日)など、枚挙に暇が無い。

特に、国立新美術館「チューリヒ美術館展」(2014年9月25日～12月15日)は至福の展覧会で、会期中二度見に行ってしまった。これが、近代美術のミュージアム・ピースというものだろう。実に羨ましい限りで、2時間以上たつぷり楽しませてもらった。ちなみに、図らずも同時期に開催されてい

た「オルセー美術館展」を見て、改めて19世紀の遺産だと感じ、「チューリヒ美術館展」は20世紀の遺産であると思った。前者が明暗(階調)主調の空間として、後者が色彩と物質性を強調する空間として、鑑賞後の印象の違いが明白だった。疲れ果ててロビーに出て椅子にしばらく倒れ込んだの实感で、肌で感じた空間感覚である。

東京ブロックでは、常時多くの優れた美術品がめまぐるしく紹介されて美術ファンは恵まれている。しかし、東京国立博物館や国立西洋美術館を除いて、広い常設展示室を備えた都内の美術館は多いとは言えない。時代の空間意識を直接体感できる美術館の常設展示室は必須であり、将来ある子どもたちのためにも必要だ。

東京都庭園美術館の華やかなリニューアルも話題になった。2011年から長期休館中だったが、「アーキテクト／1933／Shirokane アール・デコ・建築をみる」展(2014年11月22日～12月25日)と内藤礼のインスタレーション「信の感情」で再スタートを切った。反対に、東京都写真美術館は開館20年目を迎え、2014年9月から改修工事のため、長い休館に入っている。リニューアル開館は、2016年春の予定だという。木場の東京都現代美術館も同じく開館20周年で、数年後にやはり改修休館に入ると噂されている。さらにブリヂストン美術館は、今年5月からビルの建て替えのため長期休館に入る。空調機器等の改修は経費も期間も多くかかり、美術館にとっては共通の実に頭の痛

い問題である。一定の温湿度を保つためには仕方がないとしても、せめて一世代(30～40年)くらいは長い休館を含む大規模改修をしないで済まないものだろうか。優れた常設コレクションを持っている美術館の長期休館は寂しい限りである。

有名作家の訃報も、大きなインパクトを与えた。10月26日、「千円札裁判」などで知られる赤瀬川原平の死(享年77歳)は、町田市民文学館の「尾辻克彦×赤瀬川原平 文学と美術の多面体」展(2014年10月18日～12月21日)オープン直後、千葉市美術館での「赤瀬川原平の芸術原論」展(2014年10月28日～12月23日)オープン直前だった。町田市在住で、武蔵野美術大学油絵科中退であり、日本画科客員教授、小説家、美術家、漫画家、路上観察家であり、日本の前衛芸術とサブカルチャーの両方に大きな影響を与えた自然体の芸術家だった。また、9月29日だったが多摩美術大学教授の画家、辰野登恵子の若すぎる死(64歳)もかなりショックだった。日本の抽象絵画を代表する画家の一人として、作家をはじめ多くの美術関係者に注目されていた。振り返れば2年前、2012年8月から12月にかけて国立新美術館で開催された「与えられた形象—辰野登恵子／柴田敏

雄」展では、初期作品から最近作まで各時代を代表する絵画が展示され、とりあえず全体を回顧できたのが幸いだった。会場を何度も行きつ戻りつして、辰野登恵子の幅の広さと実力と魅力を再認識した。そして、新しい色彩と空間を手探りで再構築しようと少しずつ歩んできた画家の執念を感じた。カタログの対談の中で辰野登恵子はこう言っている。「今でもそうだけど、絶望に近い切羽詰まった状況の後には、何故か必ず良い絵が描ける。」今更だが、開催した美術館と学芸員の献身的努力に感謝したい。

たとえ入館者は少なくとも、話題にならなくとも、自国の現存作家は大事にしなければならないし、優れた作品は美術館が後の世代に残す義務がある。何度も見ていればいずれ作品の価値は分かる。逆に2、3度見て飽きる作品は後世に残す必要はない。私たちはいずれいなくなるし、作家も亡くなる。しかし、何度見ても飽きない作品は残り、それに感動する子どもたちもいる。2020年のオリンピックに向けて、この当たり前の認識にもう一度立ち返って仕事がしたい。何が私たちの時代の遺産(legacy)だろうか。やっぱり、美術館においては見て飽きない作品、優れた作品しかないと思う。



「与えられた形象—辰野登恵子・柴田敏雄」展図録



「チューリヒ美術館展」図録

## 北陸新幹線開業元年、にぎわいと活気のなかで

浅地 豊 (あさじ ゆたか・富山県水墨美術館)



2015年3月14日、待望の北陸新幹線金沢―長野間が延伸開業し、晴れて北陸と首都圏を結ぶ金沢―東京間が開通した。今、北信越ブロックでは、この開業を記念した展覧会が、各地で開催され話題を呼んでいる。

さしずめ新幹線の開通前と後を比較すると、以前の金沢―東京間は、在来線と上越新幹線を乗り継いでいたため、3時間47分の所要時間を費やしていた。ところが開通後は、最速2時間28分で到着し1時間19分を短縮。私が住む富山も、富山―東京間の所要時間が2時間8分と、1時間3分の短縮となった。

こうした移動時間の大幅な短縮は、地元の観光やビジネスなどの交流人口の増加を産み、更には地域活性化効果や、文化の交流も大いに期待されているところである。ちなみに今年のゴールデンウィークの北陸新幹線利用者数は、石川・富山県ともに、在来線特急使用の前年比の約3倍を記録し、開業元年を象徴するような、にぎわいと活気を見せた。

新幹線駅が新設された長野、新潟、富山、石川各県の美術館では、今年1年を通して開業記念展の開催が多数予定されている。既に4月までに開催された記念展だけを数えても、長野県の飯山市美術館「齋藤一郎 和紙展」(4月18日～6月28日)、新潟県上越市の小林古径記念美術館「小林古径芸術へのいざない」(3月7日～6月14日)、富山県では、宇奈月温泉のセレネ美術館「黒部今昔―冠松次郎と、現在の黒部」(4月22日～7月

20日)、黒部市美術館「岩崎貴宏展」(4月25日～6月28日)、富山県立近代美術館「世界・日本の20世紀美術 旅する100年」(3月14日～5月10日)、富山県水墨美術館「横山大観展」(3月13日～5月10日)、石川県では、石川県七尾美術館の「長谷川等伯展」(4月18日～5月10日)、松任中川一政記念美術館「館蔵名品展」(3月10日～8月30日)、金沢湯涌夢二館「夢二の旅」(4月18日～8月16日)、そして石川県立美術館の「加賀前田家百万石の名宝」(4月24日～6月7日)等、わかるだけでも10本が開催されている。

なかでも、終着駅の石川県と、お隣富山県の両県立美術館では、いずれも力を入った大型展を開催し特に話題となった。

富山県立近代美術館と富山県水墨美術館の2館は、いずれも「旅」を大きなテーマに、開業記念展を開催している。富山県立近代美術館では、「世界・日本の20世紀美術 旅する100年」を開催。本展は同館のコレクションを中心に、世界・日本の20世紀美術の多様な展開を、全館展示で紹介した。会場には、絵画・彫刻・デザイン(ポスター、椅子)の厳選された作品に加え、富山県出身の詩人・美術評論家の瀧口修造氏のコレクションが並んだ。

また、3月21日から東京ステーションギャラリーを会場に、同館のコレクションを紹介する「ピカソと20世紀美術」(3月21日～5月7日)を開催。北陸新幹線により結ばれる東京と富山の2会場で、

同館のコレクションを大々的にお披露目した。

更に、富山県水墨美術館では、「横山大観展 富山を愛した巨匠」を開催した。本展は、近代の日本画と水墨画に輝かしい足跡を残した、横山大観の画業を紹介するもので、「人」「自然」、そして「旅」をテーマに会場を構成し、大観が生涯追究し続けた日本人特有の美意識とその表現について顕彰した。中でも大観の代表的なモチーフとして知られる「富士山」について、大観自身が「越中立山の頂上から望む富士はことに良い」と語り、若い頃富山に旅して、作品を残していることはあまり知られていない。そこで今回は、大観の立山登山を記録した富山に残る記念写真や、富山の風景を描いた作品等、大観にとって思い出深い富山との関わりをあわせて紹介した。

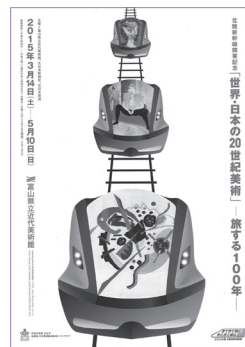
石川県立美術館では、「加賀前田家百万石の名宝―尊経閣文庫の名品を中心に―」を開催した。加賀藩前田家の歴代藩主は、優れた武人であるとともに、文化にも深い関心を寄せ文化政策を進んで推し進めた。「加賀文化」は江戸時代の前期にほぼ確立したといわれて、そのコレクションは、茶の湯の精神を根幹とした美術工芸品や内外の文物、

文書・典籍類の名品に収集に力を注ぐなど、ながく充実整備に努めた。そして1926年に育徳財団を設立し、現在は公益財団法人前田育徳会として国宝22件・重要文化財77件を含むわが国有数の文化財の宝庫となった。

本展は国宝15件、重要文化財35件を含むかつてない規模で、前田育徳会の所蔵品を中心に加賀藩前田家ゆかりの名品を展示。藩政時代に大輪の花を咲かせた「加賀百万石の文化」の全貌を公開することによって、広く石川県、金沢の魅力を発信・紹介した。

こうした開業記念展の内容をあらためて振り返ると、各美術館が、それぞれの独自性を強く打ち出しながら、風土や伝統といった地方文化の特色も色濃く映し出していることに気付かされる。

北陸新幹線開業元年を迎え、地方は確実に人や物、そして様々な情報が、短い時間で大量に運ばれている。首都圏に地方が近付き、その様相も少しずつ変わってゆくなかで地方の美術館が何を残し、何を変え、何を発信して伝えてゆくべきか、今回、もう一度見つめ直す好機になればと考える。



富山県立近代美術館  
「世界・日本の20世紀美術 旅する100年」展  
チラシ



富山県水墨美術館  
「横山大観展 富山を愛した巨匠」展チラシ



同展開会式会場風景

## 少女は強くなったか？

以倉 新(いくら あらた・静岡市美術館)



「美少女の美術史」展(静岡県立美術館、2014年9月20日～11月16日)は、考えさせられる展覧会だった。「美少女なんて、いるわけじゃない。」というコピーとともに、タイトルからして刺激的な展覧会だが、青森、静岡、島根(石見)の県立美術館3館による共同企画である。カタログ巻頭の3館学芸員による「企画者座談会」には、企画経緯が軽妙に語られていて、この展覧会にふさわしい解題になっている。

それによると、「美少女」と銘打っているが「少女をテーマ」にしており、「近代以前までさかのぼって“美術の中に少女がどう表されてきたか？”」をできるだけ幅広く紹介したという。会場には、近世の遊楽美人図や浮世絵から、近代美人画、そしてもちろんマンガやアニメ、現代美術にフィギュアまで200点近くが並んだ。

「少女」をめぐる、時代も背景も異種混交するイメージの中を茫然と歩きながら、若い女性の多さが目についた。こういったテーマは、一昔前はジェンダー的な視点抜きには語りにくかったが、フィギュアを楽しげに覗き込む女子高生(中学生?)の姿に今さらながら感慨を覚えた。もちろん企画者は、「少女」の定義(「少女」は近代の学校制度とともに生まれた)やそれに向けられた「欲望」にも自覚的であることは、図録を読むとよく分かるが、敢えて「展覧会として中立な立場をとった」というところに時代を感じる。「美少女」の表象を屈託なく眺める少女たちの姿は、多文化主義の成熟か、社会的

関心の退行、一種の幼児化か……

同館では、近年夭折した画家(焼津市出身)の回顧展「石田徹也展—ノート、夢のしるし」(2015年1月24日～3月25日)も開催された。管理された現代社会の息苦しさを自身の孤独や苦悩として、独特の自画像に託して描いた画面に多くの若者が見入っていた。やはり時代は退行などしておらず、「少女」たちは強くなったのだろう。

県東部では「菅木志雄」展(ヴァンジ彫刻庭園美術館、2014年11月2日～2015年3月24日)が印象深かった。同時期、東京でも個展が開催されていたが、同館では自然豊かな広い敷地を活かした野外インスタレーションもあり、気持ちのよい展示だった。同館は、意欲的な展覧会を次々と開催しており、学芸の企画力と企業立美術館の柔軟な運営がマッチした幸福な例だろう。

企業立といえば掛川市には資生堂アートハウスがある。いつも新鮮な切り口で魅力的な展覧会を開催しており、「工芸を我らに」展(2015年1月15日～3月29日)もタイトルからして惹かれたが、残念ながら見逃してしまった。「絵画者 中村宏展」(浜松市美術館、2015年2月14日～3月29日)は、作品寄贈を受けた回顧展で、中村は浜松市出身。高齢ながら本人が展示構成に関わったというから貴重な展覧会だったと思う。

さてここまで、全て静岡県内の展覧会で、愛知、岐阜、三重に跨る東海ブロックの報告としては誠に申し訳ない。しかも自身の関心が現代美術に偏っ

ていて、見聞の狭さは如何ともし難い。

東海地域には、愛知の瀬戸や常滑、岐阜の美濃など国内有数の窯業地があり、相次いで開かれた「世界とつながる本当の方法 みて・きいて・かんじる陶芸」展(岐阜県現代陶芸美術館、2014年11月8日～2015年3月15日)、「愛知ノート—土・陶・風土・記憶—」展(愛知県陶磁美術館、2015年1月10日～3月15日)は、いずれも現代陶芸の多様な広がりを紹介していて、是非と思ったが見逃してしまった。画家ゆかりの地ならではの回顧展として、「生誕100年 浅野弥衛 一描線の詩学」展(三重県立美術館、2014年10月1日～12月21日)も、その繊細な線とモノクロームの静謐な画面を見に行きたかったが、叶わなかった。

最後に、開館してようやく5年となる当館では、秋に「国宝 久能山東照宮」展(2014年10月4日～11月24日)を、年度末には「没後100年 小林清親展」(2015年2月7日～3月22日)を開催した。静岡市は、家康が駿府に起居して以

来の徳川ゆかりの地で、前者は、家康から慶喜まで徳川家歴代将軍の甲冑が肖像画とともに初めて勢揃いした。明治を生きた最後の浮世絵師、小林清親も元幕臣で、維新後の徳川家静岡移封に従い一時静岡に暮らした。江戸の面影を残しつつ、急速に変貌する東京の姿を詩情豊かに描いた作品など約280点を紹介、練馬区立美術館との共同企画である。毎年、1、2本だがこういった自主企画展も重ねていきたいと考えている。

静岡駅前にある当館は、エントランスホールが広く無料ゾーンとなっている。そこで毎年、現代の美術を紹介するShizubi Projectを開催、初回は袴田京太郎、第2回小林且典、第3回村源と「彫刻とは何か」を考えてきた。昨年度は初めてテーマ展「ヒトのカタチ、彫刻 津田亜紀子／藤原彩人／青木千絵」展(2014年12月16日～2015年3月22日)を開催。ヒトのカタチと「彫刻」の関係は、もちろん大きすぎるテーマなのだが、素材も世代も違う3人の作品を紹介した。毎回、カタログにも力を入れており、こちらも継続していきたい。



「Shizubi Project 4 ヒトのカタチ、彫刻 津田亜紀子／藤原彩人／青木千絵」展会場風景(撮影:神藤剛) 静岡市美術館

## 「展示の環境」と「解説パネル」について

南城 守 (なんじょう まもる・奈良県立美術館)



近畿ブロックでは例年、国立機関の大規模展が衆目を集める。今春も京都国立博物館の「桃山時代の狩野派～永徳の後継者たち」展(2015年4月7日～5月17日)は大々的な広報を展開し、周到に準備された内容を展観。奈良国立博物館の「まぼろしの久能寺経に出会う～平安古経展」(2015年4月7日～5月17日)は、一般受けは難しいと思える内容だったが、信仰心が育んだ美を垣間見せるもので、いずれも両館の性格を浮かび上がらせていたように思う。

一方、公立館の活動は、海外コレクションの巡回展は別として、各館の所蔵品を中心とした企画展や連携展示が見直され、展覧会タイトルやキャッチコピー、広報、または地域と密着した関連事業などに財政難打開への創意工夫が示されている。所蔵品を核として斬新な切り口を提示するスタイルが浸透し、近年ではいささか過言とも思えるタイトルの競合が話題となっているが、集客至上主義の潮流は時代によって移り変わるものの、学芸員の意外な発想に繋がるかもしれない。

ところで今回の取材を通じて、あらためて美術館を取り巻く環境の重要性を感じた。たとえばMIHO MUSEUM「バーネット・ニューマン展」、日本美術の愉悦展(2015年3月14日～6月7日)と、あべのハルカス美術館「川喜田半泥子物語展」(2015年3月17日～5月10日)。豊かな自然景観と空中都市という対極の環境は、いずれも日常の喧噪を忘れさせる超越感を漂わせ、鑑賞前後の

高揚と余韻を増幅させるような効果に満ちていたように思う。

さらに今春、京都市美術館、京都文化博物館をメイン会場として、市内数ヶ所で開催された「PARASOPHIA 京都国際現代芸術祭 2015」(2015年3月7日～5月10日)。現在、日本各地で開催されるアートイベントの没個性的な傾向が懸念されるだけに、京都という歴史的環境を背景にどのように構成されているか興味深く、たとえば鑑賞者が「琳派 400 年記念祭」と交差するかのよう、古典の審美眼を持って現代アートと触れる機会となるのではと注目していた。だが、展覧会は、そういった関連性を掲げることも、テーマ性を設けることもなく、いささかの外れな期待であったことは否めない。とは言うものの、京都という「本物」がある芸術的土壌の層の厚さと柔軟性を感じざるを得なかった。鑑賞者が自らストーリーを思い描くことができる自然、都市、歴史的土壌…、展覧会構想の原点に「環境」があることを再認識した次第である。

さて、最後に奈良県立美術館の近年のささやかな取り組みについても触れておきたい。

2 年前から始めた展示解説についての改革である。B5 サイズ以下だったキャプションを A3 版に拡大し、解説パネルは文字を大きく簡明なものを作成し、入館者サービスの徹底を図った。キャプションの小型化や最小限の設置が一般的な傾向である現在、まるで時代を逆行するような試みは、

当初、「過剰」と非難されるのではないかという懸念もあった。

しかし、蓋を開けてみれば入館者からの支持は大きく、回答をいただいた数千枚のアンケートを分析した結果、高齢者のみならず、一般から学生まで幅広い賛同を得たことが分かった。とりわけ「国際現代アート展なら 2014 (前・後期展)」(4 月～7 月)においては、おおよそ現代アート会場にふさわしくないと思われた数多くの大型の解説キャプション類が肯定されていた。当館は入館者の半数以上が県外からで、京阪神地区が中心である。つまりこの回答は奈良の客層の特性ということだけにとどまらないだろう。とすれば、従来の鑑賞のさまたげにならないようにという配慮が、いつしか不親

切という、本末転倒な状況を招いていたことになる。当然、時代と共に価値観と美意識は変わるものでこの意見も絶対ということはないが、いずれにせよ来館者目線で作品鑑賞のあり方を再検討することの重要性を改めて感じたのである。ちなみに現在、京都国立近代美術館で巡回されている「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展」(2015 年 3 月 31 日～5 月 31 日)には、数多くの解説キャプションが設置され、鑑賞の手引きを供するものであったことを付け加えておきたい。

豊かな歴史的環境に恵まれた奈良で「地に足着いた活動」を再考しながら、せめて解説サービスぐらいいは過剰といわれるまでやってみてもいいかもしれない、と思う今日この頃である。



奈良県立美術館展示室  
「奈良礼賛～天心、フェノロサが愛した近代美術と奈良の美」展  
(2015 年 4 月 11 日～5 月 24 日)



奈良県立美術館展示室  
「富本憲吉展～華麗なる色絵・金銀彩」展(2015 年 1 月 17 日～3 月 15 日)

## 巡回展は中国地方を駆けめぐる

高嶋雄一郎 (たかしま ゆういちろう・神奈川県立近代美術館)



岡山へと居を移して5年足らず、その間での実感の一つが、美術館における巡回展の多さであった。もちろんこれには、一鑑賞者としての利点もあり、一学芸員としての実情も感じているのだが、今回、中国地方の半年の展覧会を報告する大役を仰せつかるに際し、見識も関心も狭い某の視点から記すことに戸惑うのだが、この機会に、巡回展の実情について多少なりとも迫れればと思い、簡単にリストで統計を取ってみることにした。

まずこの簡易なリストでも一瞥して気付くのは、展覧会の内容や規模によって巡回の可否が決まるのではないことだ。海外からの大型借用だから、収入の見込み難い現代美術展だから、といった理由ではなく、様々な分野の巡回展が確認できる。これは、その展覧会自体に関心ある美術館が比較的自由意思で参加しているとも言えるし、一方で昨今では単館での開催がほぼ難しく、展覧会の質を下げないために巡回展での企画が一般的となったとも言えるのか。

次に気になるのが、中国地方で立ち上がる展覧会が少ないことだ。ここに挙げた展覧会16のうち11、つまり70%弱の展覧会が、中国地方外での立ち上げとなっている。これは作品集荷の際の利便性(特に海外からの場合)など色々な条件があるので、致し方ないのかもしれない。

次に、4箇所以上を巡回する展示のうち、62%の展覧会が、中国地方を複数箇所も巡回している点も興味深い。以前のように「一地方につき一美術

館」ではなく、輸送費や効率を考慮して近場でも県を跨げば…というような組み方がなされていることが想像される。実際には各開催館の時期の都合など様々な要因が想定されるが、岡山県立美術館でも開催された「MOOMIN! ムーミン展」(2015年3月20日～4月19日)のように、まるで焼き畑農業のように全国を縦横無尽に駆け巡っている展覧会もある。同展は岡山県美でもたった1ヶ月程度の開催期間で入場者数47,000人超を記録したそう、私が5年間弱岡山にいて企画・担当した現代美術系の展覧会5本の来館者数を全て合計しても全くなかない。色々と考えさせられる結果である。

話を元に戻そう。これらの巡回展で特に印象的だった展示を挙げれば、個人的な関心に即して言えば「赤瀬川原平の芸術原論」(広島市現代美術館、2015年3月21日～5月31日)と「戦後日本住宅伝説」(広島市現代美術館、2014年10月4日～12月7日)だろうか。前者は赤瀬川の全貌を紹介したと呼ぶうるとも充実した展覧会だったし、美術館であのような多彩な人物をどう切り取るか、という好例となったのではないかな。また後者は、建築展がすっかり定着した昨今でもなおこの表現をどう展示室に落とし込むのか難しい中、映像資料や住宅を実物大で再現した大型出力写真などを効果的に用いた展示は巧妙で、また会場の区切り方も秀逸で大いに刺激を受けた展示だった。

また、近年一つの主題を軸に絵画展を組み立て

る傾向が散見される。近年では花、こども、食べ物といったような主題が見られた中で、ふくやま美術館で立ち上がった「夜の画家たち 蠟燭の光とテネブリズム」展(1月24日～3月22日)はとても秀逸だった。光と闇を描いた江戸時代の表現に始まり、明治時代の油画、そして西洋の模作とトゥールなどの実作を実際に並べつつ組み立てて

いくことで、見事に軸の通った、情感に訴える展覧会になっていた。

最後に私事ながら、3月末をもって岡山を去り、今は葉山に居を移した。地方に住んだことで美術展に対する考えが少なからず変わった気がしており、これからは腰を据え、この東京との絶妙な距離感の中で、美術館なるものを考えていきたい。

中国地方に巡回した主な展覧会 \*グレーは中国地方以外の会場

|                                |                           |                         |
|--------------------------------|---------------------------|-------------------------|
| 三沢厚彦 ANIMALS                   | 高松市美術館                    | 2014.07.11 - 2014.08.24 |
|                                | 岩手県立美術館                   | 2014.09.09 - 2014.10.14 |
|                                | 周南市美術館                    | 2014.11.21 - 2015.01.18 |
|                                | 高梁市成羽美術館                  | 2015.01.31 - 2015.05.31 |
|                                | 埼玉県立近代美術館                 | 2014.07.05 - 2014.08.31 |
| 戦後日本住宅伝説                       | 広島市現代美術館                  | 2014.10.04 - 2014.12.07 |
|                                | 松本市美術館                    | 2015.04.18 - 2015.06.07 |
|                                | 八王子市夢美術館                  | 2015.06.00 - 2015.07.00 |
|                                | 千葉市美術館                    | 2014.04.08 - 2014.05.11 |
|                                | 岡山県立美術館                   | 2014.09.26 - 2014.11.03 |
| トーマ・ヤンソン生誕100年記念 MOOMIN! ムーミン展 | 松屋銀座                      | 2014.04.16 - 2014.05.06 |
|                                | Nanak (盛岡)                | 2014.05.10 - 2014.06.08 |
|                                | 米子市美術館                    | 2014.06.14 - 2014.07.13 |
|                                | 丸井今井札幌本店                  | 2014.07.23 - 2014.08.04 |
|                                | 広島県立美術館                   | 2014.08.08 - 2014.09.06 |
|                                | 米沢市上杉博物館                  | 2014.09.13 - 2014.10.26 |
|                                | あべのハルカス美術館                | 2014.12.11 - 2014.12.25 |
|                                | みやぎアートセンター                | 2015.1.2 - 2015.2.15    |
|                                | 岡山県立美術館                   | 2015.03.20 - 2015.04.19 |
|                                | 松坂屋美術館                    | 2015.04.25 - 2015.05.17 |
|                                | 東京ステーションギャラリー             | 2014.01.18 - 2014.03.09 |
|                                | 伊丹市立美術館                   | 2014.04.12 - 2014.05.23 |
|                                | 高知県立美術館                   | 2014.11.02 - 2014.12.23 |
|                                | 岡山県立美術館                   | 2015.01.09 - 2015.02.22 |
|                                | 岡山県立美術館                   | 2014.09.20 - 2014.11.16 |
| 安井曾太郎の世界 人物画を中心に               | ふくやま美術館                   | 2014.11.22 - 2014.12.25 |
|                                | 佐倉市立美術館                   | 2015.10.28 - 2014.12.23 |
|                                | 千葉市美術館                    | 2015.01.07 - 2015.02.22 |
|                                | 大分市美術館                    | 2015.03.21 - 2015.05.31 |
|                                | 広島市現代美術館                  | 2015.01.24 - 2015.03.22 |
| 赤瀬川原平の芸術言論                     | ふくやま美術館                   | 2015.01.24 - 2015.03.22 |
|                                | 山梨県立美術館                   | 2015.04.18 - 2015.06.14 |
|                                | 三井記念美術館                   | 2014.04.19 - 2014.07.13 |
|                                | 佐野美術館                     | 2014.10.04 - 2014.12.23 |
|                                | 山口県立美術館                   | 2015.02.21 - 2015.04.12 |
| 夜の画家たち 蠟燭の光とテネブリズム             | 富山県水黒美術館                  | 2015.06.26 - 2015.08.16 |
|                                | 岐阜県現代陶芸美術館                | 2015.09.12 - 2015.12.06 |
|                                | Bunkamura ザ・ミュージアム        | 2014.12.23 - 2015.03.01 |
|                                | 尾道市立美術館                   | 2015.07.18 - 2015.09.23 |
|                                | 海の見える杜美術館                 | 2014.11.01 - 2014.12.14 |
| 超絶技巧! 明治工芸の粋                   | 姫路市立美術館                   | 2015.02.07 - 2015.03.29 |
|                                | 碧南市藤井達吉現代美術館              | 2015.04.14 - 2015.06.07 |
|                                | 小杉政徳記念日光美術館               | 2015.07.18 - 2015.08.30 |
|                                | 静岡県美術館                    | 2014.04.12 - 2014.06.01 |
|                                | 岡山県立美術館                   | 2014.07.18 - 2014.08.24 |
| 川端康成と東山魁夷                      | パリ日本文化会館                  | 2014.09.16 - 2014.10.31 |
|                                | 鳥根県立美術館                   | 2015.03.20 - 2015.05.10 |
|                                | ニューオータニ美術館                | 2013.03.16 - 2013.05.26 |
|                                | 川越市立美術館                   | 2013.10.19 - 2013.12.08 |
|                                | 広島県立美術館                   | 2015.11.18 - 2015.02.15 |
| ジャパンビューティー 描かれた日本美人            | 奥田元栄・小由女美術館               | 2014.04.04 - 2015.05.18 |
|                                | 郡山市立美術館                   | 2014.06.28 - 2014.08.24 |
|                                | 下関市立美術館                   | 2015.02.07 - 2015.03.29 |
|                                | 香川県立ミュージアム                | 2015.04.18 - 2015.05.24 |
|                                | パナソニック汐留ミュージアム            | 2016.01.16 - 2016.03.21 |
| イングリッシュガーデン 英国に集う花々            | 鹿児島市立美術館                  | 2014.10.02 - 2014.11.09 |
|                                | 下関市立美術館                   | 2014.11.15 - 2014.12.28 |
|                                | 横須賀美術館                    | 2015.02.07 - 2015.04.05 |
|                                | 詩情とエスプリの画家 生誕110年 海老原喜之助展 |                         |
|                                |                           |                         |

## だれのための美術館なのか —美術でつながる地域社会—

東浦博史 (ひかしうら ひろふみ・相生森林美術館)



地方創生が叫ばれる昨今ではあるが、美術館の予算低迷はしばらく続きそうだ。こういう時代が続くと、ますます問題となるのが美術館の存在意義であろう。特に自治体が運営する美術館においては顕著であり、かくいう当館も例にもれず厳しい状態ではある。だれのための美術館なのか。そしてこの問いの答えを見つけることはできるのであろうか。

そんな思いを巡らせながら、徳島県立近代美術館で開かれた「アートでつながる ユニバーサルミュージアム展」(2015年2月10日～2月22日)を見た。この展覧会は、2014年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業として、徳島県立博物館や徳島県立21世紀館、ボランティアグループなどで実行委員会を組織し3館で開催されたもので、視覚障がい、聴覚障がい、就学前幼児、外国人、高齢者の5つのテーマでワークショップや教材づくりを行い、そして展示へと結びつけたものであった。例えば、鑑賞者の意見交換の場として「つながる交流ボード」の設置や、手元で読める解説、形を伝える触察図や手元カード、濃色を白文字で抜いた反転キャプションなど、普段の展示にも応用できないかと感じる工夫も多数あった。また、スポンジの中をくり抜き、中にできた空間を手で体感するワークショップやその作品の体験型の展示など、作家の協力を得ながら進められたものもあり、様々な美術をより身近に感じることもできた。今後の展開や当館での実践を考える、著作権やそのための触れることのできる作品制

作などクリアしなければならない問題も出てくるように思うが、様々な来館者により良い鑑賞の機会をもていただくこと、すなわち美術館の裾野を広げることの大切さをあらためて知ることができたように思う。

高知県立美術館の「高知県立桃源郷 新・高知の造形文化展」(2015年1月11日～3月22日)は、美術館と地域の関係性を模索したユニークな取り組みである。残念ながら実現できなかったが、リーフレットや図録からも企画や出品に携わった人々の熱意が伝わってくる。2007年度に続き二度目の開催とあるが、リーフレットには「ものづくりこそ、私たちの営みの根幹です。利害や名声にとらわれず、シンプルに創造へ挑もうとする人間のたくましさ、『高知県立桃源郷 新・高知の造形文化展』にてお伝えしたいと思います。高知の人々が持つ造形力とそのこだわり、また何よりも制作した高知の“ひとの面白さ”をお楽しみいただけたと思います」と記されるように、そこには地域の文化を見すえ、地域や人とのコミュニケーションに重きを置く館の姿勢を見ることができる。

地域性を活かした展示といえば、自館で開催した「自然へのまなざし 大久保英治×梅田俊作×米津光」展(2014年10月11日～11月30日)も紹介しておきたい。相生森林美術館は、1993年の開館以来、木にまつわる美術作品である木彫と木版画を蒐集するとともに企画展として取り上げてきた。本展は、3名の異なる活動を行う作家の「自

然」をテーマにした作品を紹介したものである。地元産の杉材を使って時間と痕跡を表現したランドアート作家の大久保英治。絵本作家の梅田俊作は、絵本からはなれ、枯れゆく植物や野菜から生命の転生を表した。静寂な風景を切り取った米津の写真からは、見慣れた風景の中に潜む別世界を見ることができた。異なる分野で活躍する作家たちであるが、普段身近に親しんでいる自然を独自の捉え方で表現し、自然風土と美術の関わりをあらためて問うきっかけにもなった。また、隣接する公園施設で同時に開催した「あじさい湖里山憧憬プロジェクト 森 art なか 2014」(同実行委員会主催)と協働し、美術館出品作家や地元作家、地域の子供たちなどの作品を屋内外に展示した。美術館と地

域の観光施設、地域住民の相互連携をはかった初めての試みでもあった。

地域やそこに暮らす人々、子どもから高齢者、障がいのある方など、様々な人と美術は関わっている。それを紡いでいくのが美術館の役割の一つなのは確かである。そして、広く一般に作品の魅力を伝えることもまた大きな使命である。地域の文化施設として、地域住民にどれだけ浸透して(利用ではなく)いけるかが一つの鍵になるであろう。

四国にも多くの美術館施設が誕生して四半世紀をむかえようとしている。施設の改修時期とも重なるが、だれのための美術館なのかをあらためて問われる時期なのかも知れない。自館の問題をふくめ印象に残った2014年度下半期の四国の状況であった。



「アートでつながる ユニバーサルミュージアム展」におけるワークショップ『てさぐり彫刻して見るで』2015年2月15日  
講師：岩野勝人(大阪成蹊大学芸術学部准教授) 提供：徳島県立近代美術館

## 地方でアートに向かって

植松 篤(うえまつ あつし・鹿児島県霧島アートの森)

現在、芸術祭の類いは全国各地で開催されており、大小あわせるといったいどれほどになるだろうか。いわゆる国際展のような大規模なものから地元作家による小規模なものまで、規模や形態はさまざまである。筆者の住む鹿児島県内だけでも、ダンスを中心とした「おおすみ-かごしま芸術祭」や「徳之島アートプロジェクト」、「かごしまアートフェスタ」などが開催されている。九州ブロックで特に目を引いたのは、大分県の国東半島芸術祭(2014年10月4日～11月30日)である。

国東半島は大分県の北東部に飛び出した円形の半島で、直径が30数kmに及ぶ。この広い地域を舞台に、作品の展示やパフォーマンスなどが実施された。アントニー・ゴームリーが参加した千燈プロジェクトでは、作品が千燈岳の山頂近くに設置されている。作品近くまで車で行くこともできるが、作品設置場所を探してゴームリーが実際に歩いた旧千燈寺跡から登るルートを通って行くと、道中に磨崖仏などを拝むことができる。芸術祭で配布されたマップによると所要時間は約70分とあるが、健脚であればその半分程度で到着する。他にも宮島達男の成仏プロジェクトでは、縄文時代の遺跡に面した岩壁にLEDカウンターによる作品が展示されており、宮島の制作のテーマに結びついた場所の選定がなされていた。この芸術祭ではサイトスペシフィックな作品が、単に地形を活かしたという以上に作品のコンセプトに深く関わっており、そこにある必然性が感じられるものであった。点数

こそ多くはないが、トレッキングや周辺の寺院などを併せて楽しむことが想定されており、むしろ多くの作品を展示することは不要と感じられた。筆者の場合、都市型の芸術祭では、なるべく効率的になるよう時計や時刻表をにらみながら展示会場を廻りがちなのだが、この芸術祭では一つ一つの作品に時間をかけて鑑賞することができた。最後に付け加えておきたいのは地元の有志の方々による「おもてなし」についてである。自分たちには馴染みのないであろう現代美術の来場者のために、焚き火や、ふるまいをしていただいたことに感謝の意を表したい。主催者としてはよかれと実施している事業であっても、地元住民の多くにとっては言わば「外の文化」であって、作品や事業が地元はどう関わり受け入れられるのかというのは、特に地方での実施においては重要な点である。

宮崎県では、宮崎県立美術館において地元出身の漫画家横山裕一を取り上げた「横山裕一×シュルレアリスム」展(2014年11月1日～12月7日)が開催されていた。横山の漫画はネオ漫画と呼ばれ、一般的な漫画作品と比べると突飛に見えるが、コマ間の時間の流れ方の統一や、形喩の使い方など、漫画的な表現方法についてよく考えられている。展覧会名にあるように、横山の作品と館蔵品のシュルレアリスム作品を展示しているが、あくまで横山を中心とした展示構成だ。シュルレアリスムの作品展示は、横山的世界から過去の作品を見つめ直す面白い機会であった。展覧会では、ネオ漫画の原

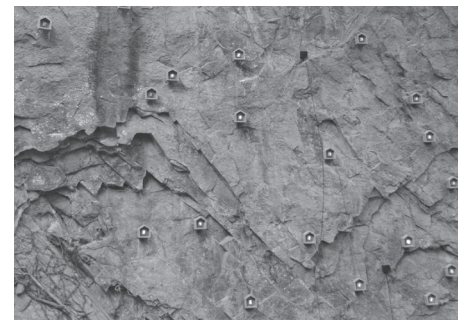
画はもちろんのこと、初期の貴重な絵画作品なども展示されていた。スライド式のプロジェクションや小部屋の設置など、展示に工夫が見られ、作家の世界観がよく現れていた。県立の美術館で横山の展覧会を開催することは冒険であったと思われるが、こうした新しい作家を取り上げる企画を継続してもらいたい。

鹿児島県では、鹿児島市立美術館で「ゼロ年代の絵画」展(2015年2月10日～3月29日)が開催された。所蔵品を使った2000年代の絵画表現をテーマとした小企画展であり、作家10名による10点のみの展示である。担当学芸員が作者にあえて電子メールという方法で質問をしており、そのやりとりの内容が作品とともに展示されている。これらの作者たちは全員が南日本新聞社の主催する公募展である南日本美術展の副賞で海外留学をしている。この公募展は今年で第70回を迎え、戦後の鹿児島の美術を支えてきた歴史がある。鹿児島

は美術のインフラがある面では整っており、創作をする層も一定数いる。しかし、ギャラリーや美術館等の施設は限られており、活躍の場は多くはない。今後の発展のためには、多様な発表の場が必要に思われる。鹿児島の近年の動きとしては、かごしま文化情報センター(KCIC)が一昨年オープンし、「美術」「音楽」「伝統芸能」に関する情報のインフラ整備と美術関連のイベントを実施している。この4月には施設を拡張し、展示なども行えるようになっており、今後の地域の文化の活性化が期待される。地方においてアートが成立することの難しさを日々感じているが、各地でそうした困難を乗り越えて発展していくことを願うばかりである。最後に、九州ブロックは広大でとても全地域を廻ることができなかったが、大きなトピックとして大分県立美術館の開館と福岡アジア美術トリエンナーレの開催があったことを付け加えておきたい。



国東半島芸術祭 千燈プロジェクト  
アントニー・ゴームリー(ANOTHER TIME XX)



国東半島芸術祭 成仏プロジェクト  
宮島達男(Hundred Life Houses)

no.1

## (一財) 藤城清治美術館 那須高原

〒 325-0301 栃木県那須郡那須町湯本 203



TEL: 0287-74-2581  
 FAX: 0287-74-2582  
 E-mail: info@fujishiro-seiji-museum.jp

〔開館時間〕  
 午前 9 時 30 分から午後 7 時 30 分まで  
 (入館は午後 6 時 30 分まで)

〔休館日〕  
 火曜日 (祝日の場合は開館)

〔開館時期〕  
 2013 年 6 月 15 日

藤城清治美術館 那須高原は、影絵作家の第一人者、藤城清治の 70 年を超える長年の影絵制作活動の集大成として四季美しい那須高原の森に 2013 年 6 月に誕生した。藤城清治初の常設美術館で、敷地面積約 10,700㎡、建物面積約 940㎡、約 200 点以上の作品を見ることができる。

敷地内には藤城自身がずっと建てたかったレンガ造りの教会があり、こだわってデザインしたステンドグラスは、光に包まれるひとときが過ごせる。門をくぐると小径にカエルやネコのオブジェが点在し藤城清治の世界へと案内する。展示室内は昭和初期の白黒作品から色を使ったメルヘンの世界へと変化していき、宮沢賢治コーナー「風の又三郎」には藤城直筆の解説が見られる。

展示室の一番奥には横幅 6m の巨大水槽を使用した渾身の大作《魔法の森に燃える再生の炎》があ

り、藤城オリジナルの影絵シアターでは舞台裏ものぞき見することができる。

精力的に日本全国を訪ね歩きスケッチを重ね創り上げた原画やデッサン、東日本大震災の被災地を描いた作品、被災地の作品は全て那須高原の美術館に展示されている。

天井や壁面、床などの空間に映像が映し出されるプロジェクションマッピングは藤城独自の演出である。

1960 年代に大人気だったキャラクター、クロヨン懐かしさにふれる空間を楽しむことができる。

多くの人に生きる喜びと心の光を届ける空間として、この美術館は開館した。藤城は現在も制作に対する意欲にあふれ、現在もお進化し続けている。

(藤城亜季・ふじしろあき)

no.2

## 富山市ガラス美術館

〒 930-0062 富山県富山市西町 5-1



TEL: 076-461-3100  
 FAX: 076-461-3310  
 E-mail: bijutsukan-01@city.toyama.lg.jp

〔開館時間〕  
 午前 9 時 30 分から午後 6 時まで (金・土曜日は午後 8 時まで)

〔休館日〕  
 第 1、第 3 水曜日、年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)

〔開館時期〕  
 2015 年 8 月 22 日

を生み出しながら、館内に視覚的リズムを生じさせ、独特の鑑賞体験を促している。美術館の最上階には現代ガラス作家のデイル・チーフリによる作品を恒久設置。《ミルフィオリ》、《ペルシャン・シーリング》といった代表的な作品群を中心に巨大なインスタレーションが展開されている。

コレクションについては、開館前より収集活動を行ってきており、およそ 300 点の現代ガラス作品を所蔵している。現代ガラスの巨匠スタニスラフ・リベンスキー & ヤロスラヴァ・ブリフトヴァによる《ピラミッドの緑の目》(1993 - 95 年)、アメリカのスタジオグラス運動の中心人物であったハーヴェイ・K・リトルトンの代表作《Yellow Crown II》(1984 年)、ヴェニス伝統的技法を現代の感覚と融合させ、静謐な造形世界を展開するダンテ・マリオーニによる《Vessel Display》(2010 年) など、収蔵作品は多岐に渡る。

2015 年度は開館記念展、藤田喬平展、ハワード・ベン・トレ展の 3 つの企画展を開催予定。開館記念展では、19 名の作家によるおよそ 100 点のガラス作品が集結する。その後、日本のガラス表現を牽引してきた藤田喬平、鋳造ガラスによって巨大なガラス彫刻を生み出すハワード・ベン・トレそれぞれの個展を開催し、現代のガラス表現を多角的に検証する。今後は、数少ない現代ガラスの専門美術館として、他ジャンルや同時代の造形表現にも目配せしながら、ガラス造形の本質を検証する美術館活動を世界に発信していきたい。

(村田大輔・むらた だいすけ)

富山市では「ガラスの街とやま」をテーマに、人材の育成、産業化の推進、芸術の振興という 3 つの観点から様々な取り組みを 30 年以上にわたって行ってきた。1991 年には全国唯一の公立ガラス教育機関である富山ガラス造形研究所を開校、また作家の制作活動を支援する富山ガラス工房を 1994 年に設立。本美術館は「ガラスの街とやま」の集大成となるべく中核施設として、1950 年代以降に制作された現代ガラス美術を中心に収集、展示活動を行う予定である。

富山市の中心部に誕生する複合ビル「TOYAMA キラリ」のなかに富山市ガラス美術館は開館。御影石、アルミ、ガラスを組み合わせた外壁と、富山県産の木材をふんだんに使用した内部空間の対比が印象的なこの複合ビルは、建築家隈研吾によって設計され、富山市立図書館本館も各フロアを共有するかたちで入居している。館内に縦横無尽に配置された木材のルーバーは、ある種の柔らかな空気感

no.3

## 古田織部美術館

〒 603-8478 京都府京都市北区大宮釈迦谷 10-37 太閤山荘内



TEL: 075-491-0666  
 FAX: 075-491-0666  
 E-mail: info@futuraoribe-museum.com

【開館時間】  
 午前 9 時 30 分から午後 6 時まで  
 (入館は午後 5 時 30 分まで)

【休館日】  
 年末年始、展示替期間

【開館時期】  
 2014 年 4 月 12 日

京都洛北・鷹峯に位置する古田織部美術館は、2014 年、織部 400 年忌に合わせてオープンした私設美術館である。

古田織部といえば、近年ではコミック『へうげもの』でその名をご存知の方も多いと思われる。古田織部(1543-1615)は、師・千利休亡き後、「天下第一」と称された茶人で、織田信長、豊臣秀吉・秀頼、徳川家康・秀忠に仕えた武士。織部の指導のもとに生み出された独特な「織部好」といわれる茶道具・懐石具は、慶長年間(1596-1615)に爆発的な流行をみせた。

当館では、古田織部筆の書状、自作の竹茶杓、織部がデザインした茶道具、織部好の陶器、織部が御伽衆として仕えた太閤秀吉ゆかりの品、戦国武将茶人の茶道具・書状など約 500 点を蔵し、古田織部の美意識の世界を多角的に感じていただくことを目的とした展覧会の企画を年 4 回行っている。

今年 6 月には、美術館の隣りに小堀遠州(1579-1647)作の茶室「擁翠亭」の移築工事が完了し、内部見学を受け付けている。この茶室は、寛永期(1624-44)に、装剣金工師・後藤寛乗(通称 勘兵衛、1589-1656)が、扶持を得ていた加賀藩主・前

田利常を招くために小堀遠州に依頼して自邸の擁翠園内に作らせた茶室である。三疊台目の小間茶室は別名を「十三窓席」といい、躰口などの口(窓)を足すと 13 カ所あり、我が国で一番窓の多い茶室である。小堀遠州は織部の弟子にあたり、縁あって解体後 140 年ぶりに当館敷地内に移築された。ほかに、太閤山荘内には、狩野派の老松図障屏画のある「太閤の間」、江戸期の絵師による雲龍図の襖のある「化龍亭」、2 階に展望茶室などもある。加えて、外苑「紅葉谷庭園」は、大きな池を中心に、春は桜、秋は紅葉といった植物が四季の移ろいを楽しませてくれる。

近年、茶の湯というものがどこか遠く馴染みのないものとなっているように思われる。日本が誇るこの素晴らしい文化を守り継承していくこともまた、当館の責務と自負するところである。当館は、古田織部の魅力を広く発信するとともに、そうした道具類を用いた茶会等も行うことで、より多くの方に茶の湯に親しんでいただく機会を設け、茶の湯を生きた文化として体感できるような美術館であることを目指している。

(宮下玄覇・みやした はるまさ)

no.4

## (公財) 泉美術館

〒 733-0833 広島県広島市西区商工センター 2-3-1 エクセル本店 5 階



TEL: 082-276-2600  
 FAX: 082-276-2612  
 E-mail: info@izumi-museum.jp

【開館時間】  
 午前 10 時から午後 5 時まで  
 (入館は午後 4 時 30 分まで)

【休館日】  
 月曜日(祝日の場合は開館)  
 年末年始(12 月 30 日～1 月 1 日)  
 展示替期間

【開館時期】  
 1997 年 3 月 19 日

公益財団法人泉美術館は、西日本を中心に大型ショッピング施設〈ゆめタウン〉などの小売業を展開する、株式会社イズミ(広島市)を母体としており、創業者の山西義政の個人コレクションを発端として 1997 年に開館した。

当館は、広島市街地から車で約 25 分、広島市西部開発事業により誕生した埋め立て地〈商工センター〉の一角に所在する。美術館は、建物の 5 階フロアに、エントランスホール、第 1 展示室、2 展示室の展示空間を持ち、そして小さな小堀遠州風の日本庭園を併設する。

主な所蔵作品の内容は、近現代の洋画、日本画、彫刻、古美術を中心とする。具体的な作家を挙げると、梅原龍三郎、中川一政、熊谷守一、須田国太郎、前田青邨、福田平八郎、村上華岳、福井爽人などで、物故作家については点数は多くないが、各作家の作風が熟成した時期の作品を中心としている。古美術は、元・明代の青花などの陶磁器を収蔵する。

さらに開館以来、宮城県出身の彫刻家佐藤忠良(1912-2011)の彫刻や素描作品を積極的に収集しており、過去 4 回にわたり個展を開催している。また、看板などに使用する館名の揮毫も佐藤忠良によるも

のであり、現在ではコレクションを代表する作家と言える。

展覧会は、年に特別展を 2 回、企画展を 5～6 回、所蔵作品展を 3～4 回開催している。特別展および企画展は、所蔵作品に関連する内容や、特に近年は地元広島の作家や美術団体、活動に焦点を当てる内容を主体とする。所蔵作品展は季節に合わせて作品を構成する。

その他の活動としては、広島市立大学芸術学部など近隣大学とのワークショップやギャラリートークの開催など、地域との連携も積極的に取り組んでいる。また、所蔵のブロンズ彫刻を中心に「手で触れる鑑賞」の取り組みも不定期に行っており、視覚障がい者だけでなく、その家族、特別支援学校や福祉施設の関係者など、取り組みに対して理解のある方も対象としている。

展覧会や活動を通して広島を中心とした芸術文化の発展に寄与し、外の喧騒から離れた地域の安らぎの場と、バリアフリーな鑑賞空間を提供することを目指している。

(鶴田 茜・つるた あかね)

## 今井美術館

〒 699-4226 島根県江津市桜江町川戸 472-1



TEL: 0855-92-1839  
FAX: 0855-92-0126  
E-mail: imai-art@imai-corp.co.jp

〔開館時間〕  
午前 10 時から午後 4 時まで（最終入館時間は特になし）

〔休館日〕  
第 1、第 3 土日 ※特別展開催中は無休

〔開館時期〕  
1995 年 11 月 3 日

今井美術館は、島根県江津市桜江町の山々に囲まれた風光明媚な場所にあり、外観は白壁をイメージして造られた小さな美術館である。総合建設業を営む今井産業（株）の先代社長・故今井久祥の「事業を通じて地域社会に貢献する」という遺志を継ぎ、妻である今井順子館長により、1995 年 11 月 3 日に今井美術館（今井久祥記念館）としてスタートした。当時のコレクションは主に久祥氏が生前に集めたものを中心であった。日本画や洋画、地元作家の作品は勿論、中でも今井久祥氏が力を注ぎ収集してきた韓国の現代陶芸家、申相浩（シン・サンホ）の作品だ。当初はコレクションを一般公開するというのが目的であったが、その後、20 年間にわたり数多くの企画展を開催し美術館として歩み続ける。

展示活動においては、日本画、洋画、墨彩画、水彩画、童画などの各企画展をはじめ、与勇輝の人形展、面屋庄甫の京人形展、内海清美の和紙彫塑展などの人形展などジャンルを定めず企画展としてそれぞれの優れた特性からテーマを捉え、様々な視点からその多様な魅力を取り上げ、紹介する活動をしている。

また 2000 年より独自に 7 年にわたり開催してきた「再興院展の企画展」の実績が日本美術院で認められ、2007 年より再興院展の巡回展参入に成功した。主に市街地の大きな美術館などで開催されている再

興院展が、当館のような山々に囲まれた小さな美術館で開催されるのは異例の事である。現在も再興院展島根展として毎年、多く来館者を迎えている。

収蔵作品については、院展系の新進気鋭現代日本画家の作品を主に積極的に収集を続けてきた。中でも宮廻正明（日本美術院同人）の《水火花》（1998 年）は、館の側を流れる八戸川で取材したもので、鮎を捕る投網漁の網が広がる様子が躍動感溢れる構図で描かれた作品である。代表作とされるこの作品は、国内は勿論、フランス・パリ、ハンガリーのブタペスト国立東洋博物館、ポルトガルのリスボンオリエント美術館、イタリアのフィレンツェピッティ宮殿の美術館など数多くの海外での展覧会に出品している。

その他にも手塚雄二（日本美術院同人）《風雲風神》、《雷神雷雲》、西田俊英（日本美術院同人）《祈り》、など何れも代表作と呼ばれている作品を多く所蔵する。

館の基本理念として掲げているのは、芸術に対する新しい発見と感動の場となり、文化芸術を通してかけがえのない自然と共に子ども達に伝えてゆくこととしている。

今後、地元唯一の文化の発信の役割を担う館として、地方からでも優れた芸術を発信出来る美術館としてさらに活動をしていきたい。

（月森まりえ・つきもりまりえ）

## 安来市加納美術館

〒 692-0623 島根県安来市広瀬町布部 345-27



TEL: 0854-36-0880  
FAX: 0854-36-0881  
E-mail: art-kano@dojyokko.ne.jp

〔開館時間〕  
午前 9 時から午後 4 時 30 分まで  
（入館は午後 4 時まで）

〔休館日〕  
火曜日  
年末年始（12 月 25 日～1 月 10 日）  
展示替期間

〔開館時期〕  
1994 年 11 月 1 日

安来市加納美術館は、安来平野を貫流する飯梨川上流の布部谷に位置する。当館は、当地出身の画家加納莞菴（1904-77）の作品を通して、地域文化の発展を願って莞菴の長男加納溥基が私費を投じて建設した。開館したのは 1994 年 11 月 1 日である。

若い頃岡田三郎助に学んだ加納莞菴は、小学校教師として子どもたちに絵の指導をするかたわら、意欲的に作品制作を続け、発足もない独立美術展において作品を発表した。1932 年から約 5 年間赴任した浜田では、中尾彰とともに洋画グループを立ち上げ、東京から中山巍を招いて指導を仰いだ。これによって浜田に本格的な絵画グループが誕生し、初めて中央の画壇と浜田が結ばれた。

日中戦争中は従軍画家となり、主に中国北部の戦闘や風景・人物などを描いたが、戦後はフィリピンで死刑の判決を受けた旧日本兵の救出のために尽力した。さらに、恒久平和を願って、「世界児童憲章」の制定を訴え続けた。晩年は墨彩画や書を中心に作品制作を続けた。

当館には、莞菴の絵画や書など約 130 点の作品やフィリピン戦犯釈放運動時の手書き資料や膳

写版印刷の史料が収蔵されている。また、加納溥基が蒐集した備前焼や古備前の名碗（約 780 点）も収蔵している。このほか小野竹喬と池田遙邨の日本画作品（74 点）や安来ゆかりの彫刻家西田明史や細田育宏の作品（45 点）、水彩画家青戸慧作品（22 点）などを保有している。これらの作品について、テーマを決めて年に 4～6 回企画展として公開してきた。

施設は 2002 年に広瀬町に寄贈され、2005 年、市町村合併に伴い、安来市加納美術館となった。

当館は、恒久平和を願い続けた莞菴の思いや願いを伝える企画展を中心に、河井寛次郎をはじめとして安来ゆかりの作家の作品を展示する予定である。なお、備前焼コレクションや小野竹喬・池田遙邨の日本画についても、テーマを決めて順次公開していく予定である。

展覧会の企画に際しては、安来市の市立美術館として、地域文化の掘り起しにつながる企画展や地域の人々の要望を踏まえた展示を開催するように心掛けたいと考える。そのような活動を通して、この地に住む人々にこの地の素晴らしさをお伝えしたいと願っている。

（神 英雄・じん ひでお）

## 大分県立美術館

〒 870-0036 大分県大分市寿町 2 番 1 号



©Hiroyuki Hirai

Tel: 097-533-4500  
Fax: 097-533-4567  
E-mail: info@opam.jp

## 〔開館時間〕

午前 10 時から午後 7 時まで  
(入館は午後 6 時 30 分まで)  
金・土曜日は午前 10 時から午後 8 時まで  
(入館は午後 7 時 30 分まで)

## 〔休館日〕

原則無休 (館内点検等による臨時休館を除く)

## 〔開館時期〕

2015 年 4 月 24 日

本年 4 月 24 日に開館した大分県立美術館は、大分市の中心部に位置し、大分県立総合文化センターと隣接する立地で、県の芸術文化振興の中核施設としての役割を期待されている。

設計は坂茂建築設計、シンボルマークやロゴ、館内サイン等のビジュアル・アイデンティティはコミュニケーションデザイン研究所が担当した。また、運営については、公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団が指定管理者となり、大分県立総合文化センターと一体的な管理・運営を行っている。

建物は、地上 3 階 (一部 4 階)、地下 1 階で、ガラスに覆われたシンプルな箱形となっており、3 階部分の外壁は大分の伝統的な竹工芸をイメージさせる木組みが印象的なデザインとなっている。施設は、コレクション展示室と、企画展や県民ギャラリーに利用できる展示室が 2 室あるほか、アトリエ、体験学習室、研修室等の教育普及スペースも充実している。さらに、美術館に気軽に立ち寄ってアートと触れ合ってもらえるよう、無料スペースも十分確保しており、1 階の約 1,500㎡のアトリウムには、オランダのデザイナー、マルセル・ワンダースやテキスタイルデザイナーの須藤玲子、美術家ミヤケマイらの作品を展示するとともに、2 階には美術書籍等を自由に閲覧できる情報コーナーも設置している。

所蔵するコレクションは、南画の田能村竹田、日本画の福田平八郎、高山辰雄、洋画の宇治山哲平、彫刻の朝倉文夫、竹工芸の生野祥雲齋など、大分県出身あるいはゆかりの作家の作品や資料約 5,000 点を、本年 3 月末で閉館した大分県立芸術会館から引き継いだ。これらの作品は、年間 6 期のコレクション展を通じて紹介することになっている。

企画展は年 4 本程度の開催を予定している。開館記念展では、国内外の美術館等から借用したモンドリアン、マティス、ターナーらの名品と大分を代表する作品約 200 点からなる「モダン百花繚乱『大分世界美術館』」を約 3 ヶ月間にわたって開催した。今後も、世界を視野に入れながら、地元大分の芸術文化振興に繋がるような展覧会を開催していく予定である。

また、教育普及では、個々の鑑賞者が自分なりの視点で美を享受できるようになることを目的に、身体感覚を呼び覚まししながら、五感でアートと触れ合えるようなワークショップやレクチャー等を定期的に開催することになっている。また、市町村や学校と連携したアウトリーチ活動等も県内各地で行う予定である。

今後も、県民の皆さんとともに、気軽にアートと出会い、五感を通じて美と触れ合うことのできる美術館づくりを目指していきたい。

(島田 忠・しまただし)

## (公財) 二階堂美術館

〒 879-1505 大分県速見郡日出町大字川崎 837-6



TEL: 0977-73-1100  
FAX: 0977-73-1101  
E-mail: info@nikaidou-bijyutukan.com

## 〔開館時間〕

午前 9 時から午後 5 時まで  
(入館は午後 4 時 30 分まで)

## 〔休館日〕

月曜日 (月曜日が休日の場合は直後の平日)  
年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)

## 〔開館時期〕

1994 年 10 月 10 日

二階堂美術館は、大分県の中部に位置し別府湾に面する日出町に所在する近代日本画専門の美術館である。日出町は、1601 (慶長 6) 年に初代藩主木下延俊が入国した土地で、町の中心部は、今なお城下町としての面影を残している。

当館は、JR 日豊本線の日出駅から徒歩 3 分の場所にある。

当館の運営母体は、大分むぎ焼酎の二階堂酒造有限会社である。設立者は、同社の 6 代目二階堂暹 (1930-2006) で、二階堂家に伝わる美術品を基に、積極的に収集したコレクションが核となって 1994 年に開館した。2014 年には開館 20 周年を迎えて、記念事業を無事に終えたところである。この間の 2012 年に公益財団法人の認定を受けている。

施設の概観は、土蔵造りをモチーフとした和風様式の 2 階建である。敷地面積は 1,610.62㎡、建築面積は 851.20㎡、延床面積は 1,252.94㎡。展示室は、1 階 (263.20㎡) と 2 階 (271.97㎡) の 2 室からなっている。

当館の活動は、近代日本画を中心とする資料の収集や保管、公開及び普及を行って、日本文化の伝統に対する正しい理解を深めることを目的とし、文化等の発展に寄与することを活動の基本理念とし

ている。

収蔵資料では、2007 年に故二階堂暹からの一括寄贈があり、現在では横山大観作品 54 点、川合玉堂作品 43 点、竹内栖鳳作品 29 点、上村松園作品 27 点、下村観山作品 21 点などを含む約 900 点を数えるコレクションからなり、ようやく近代日本画の展開が概観出来るような独自のコレクションの姿が目に見えるようになってきた。

展示活動は、これまで年間 5 ～ 6 回、およそ 2 ヶ月から 2 ヶ月半毎に所蔵作品をテーマを設けて紹介してきた。本年度からは、1 階展示室でテーマを設けた展示を、2 階展示室で当館の優品を紹介する常設室化を行うようにしたところである。

教育普及活動では、講演会や展示解説、夏期休業時における作品鑑賞機会の提供、ワークショップ事業を行っている。

当館の存在は、大分県内以外ではあまり知られることはなく、全国美術館会議への入会を契機にさらに情報発信に努めるとともに、今後は地域文化の中核施設として、さらに美術館活動を定着させていきたいと考えている。

(佐藤直司・さとうなおじ)

## 第 64 回総会について

前企画担当幹事 村上博哉（むらかみ ひろや・国立西洋美術館）

2015 年 5 月 28 日（木）・29 日（金）の両日、福島県郡山市で行われた平成 27 年度第 1 回理事会及び第 64 回総会についてご報告します。今回の総会の開催にあたっては、福島県内の会員館である郡山市立美術館、福島県立美術館、いわき市立美術館、諸橋近代美術館、CCGA 現代グラフィックアートセンターの 5 館に担当館としてご尽力いただきました。5 館の皆様にあらためてお礼申し上げます。

28 日午前には郡山ビューホテル・アネックスで開かれた理事会では、総会審議に先立って、前年度事業及び決算、今年度の事業計画と予算案、新規入会館の審査、新役員候補者の選任等が審議されたほか、東日本大震災復興支援事業 2 件の採択と、今年 11 月に開かれる CIMAM（国際近現代美術館会議）2015 年次総会東京大会の後援が承認されました。

同日午後、同ホテルにおいて、内堀雅雄福島県知事の歓迎挨拶（代読）及び青柳正規文化庁長官の祝辞の後、会員館 160 館・247 名の出席により、郡山市立美術館の佐治ゆかり館長を議長として総会が開催されました。

審議事項として平成 26 年度事業及び決算、平成 27 年度事業計画及び予算案に続き、8 館の新規入会が承認されました。一方、3 館の退会があったため、5 月末現在の会員館数は 376 館となりました。また、今年度は役員の改選期にあたり、理事会から提出された役員候補者について審議されました。島田康寛理事（神戸市立小磯記念美術館前館長）の退任に伴い、宇都宮美術館の谷<sup>あらた</sup>新館長及び北九州市立美術館の西村勇晴館長が新たに理事に選任され、西宮市大谷記念美術館の越智裕二郎館長及び笠岡市立竹喬美術館の上蘭四郎館長が監事に選任されました。その後、新役員による臨時理事会において、埼玉県立近代美術館の建畠哲館長が会長に再任され、副会長に徳川美術館の徳川義崇館長、国立国際美術館の山梨俊夫館長、長崎県美術館の米田耕司館長が指名されました（いずれも再任）。また、企画委員長には富山県立近代美術館長の雪山行二館長が再任され、鎌岡正謹企画委員（岡山県立美術館前館長）の退任により、北九州市立美術館の西村勇晴館長が企画委員及び地域美術研究部会長に就任されました。

報告事項では、雪山企画委員長の挨拶に続き、各研究部会の幹事の方々から前年度の

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。  
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

|                                   |                          |
|-----------------------------------|--------------------------|
| アート印刷株式会社                         | 株式会社生活の友社                |
| 有限会社アート・フリース（大阪美術）                | 「美術の窓」「アートコレクターズ」        |
| 株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ            | 全国美術商連合会                 |
| 株式会社アトリエリーブ                       | 公益財団法人ダイキン工業<br>現代美術振興財団 |
| 有限会社イー・エム・アイネットワーク                | 大日本印刷株式会社                |
| イカリ消毒株式会社                         | 株式会社丹青研究所                |
| イセ文化財団                            | Twitter Japan 株式会社       |
| 株式会社印象社                           | 株式会社 TT トレーディング          |
| 株式会社 NHK エデュケーションル                | 株式会社 DNP アートコミュニケーションズ   |
| 株式会社 NHK プロモーション                  | 株式会社東京美術倶楽部              |
| M&I アート株式会社                       | 凸版印刷株式会社                 |
| 影山幸一                              | 株式会社トップアート鎌倉             |
| 株式会社加島美術                          | 日本写真印刷株式会社               |
| カトーレック株式会社                        | 日本通運株式会社                 |
| 公益財団法人かながわ国際交流財団<br>湘南国際村学術研究センター | 株式会社パークウェーブ              |
| 関西ペイント販売株式会社                      | 株式会社美術出版社                |
| 株式会社ギャラリーためなが                     | 美術年鑑社 新美術新聞              |
| 株式会社求龍堂                           | 弘中智子                     |
| 株式会社キュレーターズ                       | 株式会社伏見工芸                 |
| 協同組合美術商交友会                        | 有限会社丸栄堂                  |
| 株式会社グッドフェローズ                      | ヤマトロジスティクス株式会社           |
| 株式会社クレヴィス                         | 読売新聞東京本社                 |
| 株式会社廣済堂                           | ライトアンドリヒト株式会社            |
|                                   | 早稲田システム開発株式会社            |

（五十音順）

活動報告と今年度活動計画の説明が行われました。続いて、東日本大震災復興対策委員会の活動について、山梨委員長より報告がありました。このほか、事務局から2019年のICOM大会招致について、また文化庁からCIMAM2015年次総会東京大会について報告がありました。

総会に続き、東京文化財研究所保存修復科学センター副センター長の佐野千絵氏による特別講演会「放射性物質汚染と文化財一対応の実際」が開かれました。原発事故による福島文化財への直接的・間接的な被害の実態と、文化財救援活動における放射線対策について、現場での経験に基づくお話を詳しく伺うことができたのは、非常に有意義であったと思います。

総会2日目の29日は、担当館をお願いした郡山市立美術館の常設展・企画展の見学が行われました。また、歓迎行事として、富岡町の居住制限区域内にある「富岡町文化交流センター学びの森」の見学バスツアーが行われ、原発周辺の被災地の現状を実際に知ることのできる貴重な機会となりました。

今回の第65回総会は、九州国立博物館に担当館をお願いして、2016年5月26日・27日に福岡県福岡市及び太宰府市で開催されます。ぜひ多くの会員館にご参加いただくようお願いします。

なお、総会の最後に建昌会長からご報告いただいたように、今回の総会をもって、全米事務局の組織は国立西洋美術館から独立することになりました。事務局の場所は当面これまで通り国立西洋美術館内に置かれますが、同館の職員は事務局の仕事から離れます。今後の事務局運営は、新たに企画担当幹事に就任された埼玉県立近代美術館の前山裕司さんと、引き続き総務担当幹事を務める小林豊子さんを中心に行われます。

国立西洋美術館は平成19年度から8年間事務局を務めました。その間、通常の事務局運営に加え、美術品政府補償制度の設立と、東日本大震災の救援・支援事業という、大きな問題に取り組むことになりました。様々な面でご支援・ご協力をいただいた会員館の皆様、この場をお借りして心からお礼申し上げます。当館で被災作品・資料をお預かりしていることもあり、震災復興関連の活動には引き続き関わってまいります。また、その他の全米の事業にも会員館として参加・協力を行いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

## 編集後記

『ZENBI』の8号をお届けする。年2回発行、基本的に加盟館にしか配布しない小冊子ではあるが、4年の年月を経てさすがに存在が認知されてきたようだ。原稿を依頼する際には誌名を伝えれば依頼内容を理解していただけることが増えた。

今回のフォーラムにはいっなくなつた多くの原稿をいただいた。以前も述べたとおり、本誌は特集主義をとらないが、今号には美術品補償制度に関する3本の原稿を掲載した。美術品補償制度の導入は全国美術館会議にとって宿願であったが、いずれの論文も指摘するところ、現行の制度は必ずしも使いやすいものではない。全国美術館会議の活動の成果ともいえるこの制度をさらにブラッシュアップし、どの美術館にとっても利用しやすい内容とするのも私たち美術館に関わる者の使命であろう。原稿を寄せていただいた皆さんに感謝するとともに、これらの提言が制度改革の一助となれば幸いである。このほかにもいくつかのタイムリーな話題について原稿をいただき、読み応えのある内容となったことと思う。本誌以外では取り上げられることのないテーマが揃ったのではないだろうか。寄稿が多かったため、次号に回した原稿がいくつかある。締切日までに提出いただきながら掲載できなかったことをお詫びしつつ、今後も積み残しが出るほどの積極的な投稿を期待している。

「東京オリンピック」を控えて、フォーラムでも触れられたCIMAMの年次総会の日本開催、さらにはICOM国際大会の京都招致といった華やかな話題が続く。その一方、全国美術館会議に所属する多くの地方公立美術館、私立美術館は相変わらず苦境にあえいでいる。現代日本の縮図さながらのこのような格差を少しでも是正する工夫を今後も誌面を通じて伝えたいと考えている。

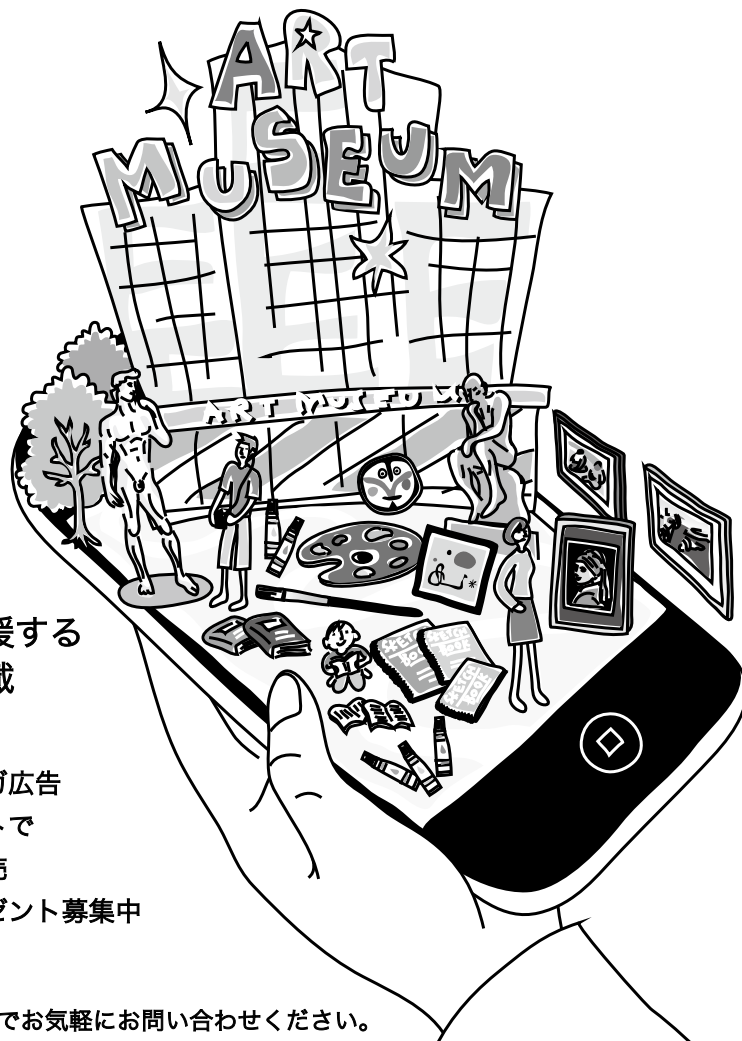
「事務局から」にもあるとおり、5月の総会をもって全国美術館会議の事務局は国立西洋美術館から独立することとなった。新しい体制が固まるまでのしばらくの間、加盟館のさらなる協力をお願いするとともに、震災をはさむ困難な8年間にわたって事務局を務めていただいた国立西洋美術館のスタッフの皆様、とりわけ村上企画担当幹事にあらためて深い感謝の念を表したい。

最後となるが、昨年度何人かの部会員が退任したことを受けて、機関誌部会では新しい部員を募集している。年に2回、京都で開かれる編集会議への参加が主な仕事である。関心のある方は、事務局もしくは幹事まで連絡をいただきたい。オブザーバー参加も歓迎する。

(O)

# 美術館・博物館情報のパイオニア ポータルアプリ

Museum **cafe** ミュージアムカフェ



ミュージアムを支援する  
広報メニューも満載

- 大人気ポスター広告
- 登録会員向けメルマガ広告
- 話題のスマホチケットで  
展覧会チケットを販売
- 展覧会チケットプレゼント募集中

ご質問・ご要望は、下記までお気軽にお問い合わせください。

[www.museum-cafe.com](http://www.museum-cafe.com)



株式会社廣済堂 新規事業推進室 ミュージアムカフェ担当  
info@museum-cafe.com 03-5484-8034

『ZENBI』では、  
次の要領で広く皆さんからの  
原稿をお待ちしています。

- |           |                                                                                                                                                        |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| [原稿の内容]   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。</li> <li>・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。</li> <li>・原稿には表題を付してください。</li> </ul>      |
| [投稿の資格]   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。</li> <li>・匿名の投稿は受けつけません。</li> </ul>                                      |
| [投稿に係る詳細] | <ul style="list-style-type: none"> <li>・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。</li> </ul>                                                                      |
| [締切]      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第9号(2016年1月発行予定)に関しては10月31日、<br/>第10号(2016年7月発行予定)については4月30日を締切とします。(当日必着)</li> </ul>                          |
| [提出先]     | <p>〈メールの場合〉 s-osaki@pref.tottori.jp (尾崎)<br/>aoyama@ma7.momak.go.jp (青山)</p> <p>〈郵送の場合〉 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館内<br/>全国美術館会議機関誌部会 幹事 青山杏子</p> |
| [問い合わせ先]  | <p>内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。</p> <p>〒680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内<br/>全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎</p>                                                    |

## ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

- 全般事項
  - (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
  - (2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されていないものに限る。
  - (3) 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
  - (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。
- 投稿文の採否
  - (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会(以下「部会」という。)に一任とする。
  - (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。
- 原稿について
  - (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
  - (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
  - (3) 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
  - (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。
- 校正について
 

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。
- 著作権について
  - (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
  - (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。
- その他
  - (1) 原稿料は支払わない。
  - (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。